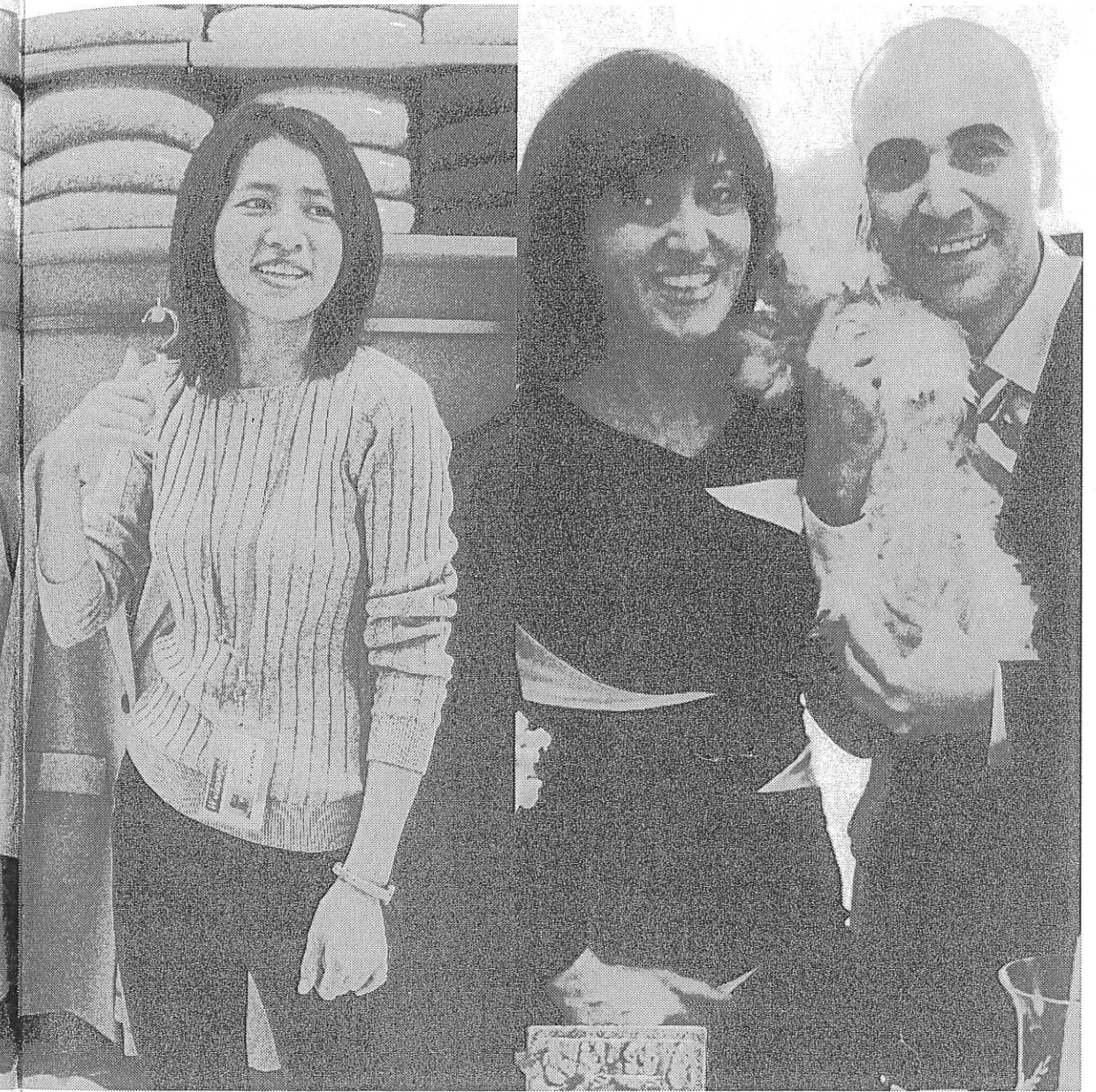


いまや約6千500万人、世界人口の113人に1人が難民・避難民に！  
故国に帰れぬ痛みを乗り越え、自立を勝ち取った3人を密着ルポ



イラン出身  
菜恵命灯さん(49)

ミャンマー出身  
チン・ハウルンさん(27)



カンボジア出身  
ペン・セタリンさん(61)

# 難民

あなたの隣にも

過密状態のゴムボートの中で見つかった遺体の数々。国連によれば、今年、地中海を渡るようになった難民たちが少なくとも3千000人死亡したという。すでに難民間題は「遠い外国での出来事」と呼ぶには深刻すぎるレベルに達している。

日本が難民を受け入れてからすでに37年。日本で生活する3世代の難民たちが語る、国境という概念を越えるまで――。

「私は、今日初めて難民として話をします」  
そう口火を切ると、イラン出身の菜恵命灯さん(49)は、集まった聴衆をその知性あふれるまなざしでグルリと見回してから、力強く語り始めた。

「20年前、故国から逃れて日本に来たとき、私はゼロからあえて人のいやがる仕事をしようと思いました。故国で大学教授であったことは過去のこと。犯罪以外のことなら何でもしよう、決心したのです」

今年2月、東京都内で開催

された特別講座「一市民として学び、考える『難民』のこと」当事者の言葉を紡ぎながら「(社会福祉法人さほうと21主催)。  
その講演者として登壇した菜恵さんの語り口は自信に満ちあふれていた。

日本にやってきてから20年、現在はビールの醸造・販売会社に勤務するが、飲食業に勤め始めてからの17年間で、数十店舗のレストランの出店にも携わったという。

リズ間  
No.2296  
題字/武田双雲

# 日本に生かされる!

# リズ間

ハウルンさんは当時、ミャンマーの大学生。政治活動に参加したことがきっかけで、身の危険を感じるようになったという。



「おしゃれに興味はなかったけれど、人と接することは好き」。レジ打ち、裾上げから、店長代行まで、アトレ亀戸店では重要な存在に



日本に来てからすでに9年。ミャンマーにいる家族とは、しょっちゅうメールのやりとりをしているというハウルンさん

「今はディレクターに昇格しました。ストレスはありますが、ストレスと収入は比例しますから、仕方ないですね」  
細身で身長は175センチほどだろうか。スキンヘッドに彫りの深い顔立ち、豊かなヒゲをたくわえた菜恵さんは爽やかにほほ笑む。会場には、妻と日本生まれの息子さんも駆けつけていた。

菜恵さんの姿は、記者が持つていた「難民」のイメージを覆すものだった。ちなみにインターネットで難民というワードで画像検索をしてみよう。  
並ぶのは、アフリカの痩せこけた子供たち、小さなボートにギョウギョウ詰めになつて陸地を目指す一団、幼い子供と手をつなぎ、疲れ切った表情で歩く人々の群れといった膨大な量の写真だ。

日本人の多くにとって、難民は、生活に困窮している人々というイメージではないだろうか。しかし、実際目の前に菜恵さんのような、カッコいい難民がいる。それは記者にとつて目から鱗だった。

日本の難民政策は、79年のインドシナ難民受け入れに始まり、すでに30年以上の歴史を持つ。確かに日本で自立し活躍している難民たちもいるだろう。  
16年は世界で難民が注目される1年だった。内戦が続くシリアなど、中東やアフリカ

## 「母国に強制送還されたら……不安にさいなまれて過ぎていた日々」

「おはようございます。今日も1日よりしくお願ひします！」  
東京・亀戸駅前のユニクロアトレ亀戸店で、開店前の朝礼が始まると、チン・ハウルンさん(27)は、スツと背筋を伸ばし、その日の申し送り

を真剣に聞き入っていた。日曜・祝日には多くの人が来店する大型店舗で、レジ打ちから接客、ときには店長業務も代行するハウルンさんもミャンマー出身の難民だ。グレーのニットが引き締まった体形によく似合う。もちろん

8月のリオ五輪では、「難民五輪選手団」が特別参加。「世界の難民に『夢はかなえられる』と伝えたい」と、力をふりしぼって戦った



強制送還されたら」と、不安にさいなまれて過ごす日々はつらかったですね」と、ハウルンさんは一瞬、顔を曇らせた。  
「不安をまぎらわすために、親戚の家ではテレビを見てばかりいました」

難民と認定されれば、日本での定住資格が与えられ、迫害を受けるかもしれない母国へ強制送還される恐怖から解放される。  
国民健康保険にも加入でき、仕事も紹介され、日本語学習などのプログラムも受けられる。難民と認定されるかどうかで、まさに天国と地獄ほどの差があるのだ。

「認定されたときは、『やっと前に進める』という安堵感でいっぱいでした。日本で働いて、ミャンマーにいる両親を支えたいという思いもいつそう強くなりました」  
ハウルンさんは認定者に用意された「生活ガイダンス」でユニクロのインターンシップ(就業体験制度)を知った。

ユニクロを展開する株式会社社ファーストリテイリングは、06年から難民キャンプに衣類を届ける活動を始め、11年から国内で認定を受けた難民とその家族に、ユニクロ店舗でのインターンシップの機会を提供。本採用の道も開いている。

「認定されたら、自分の命を守るためにやむをえず母国から逃げざるをえない人のこと。つまり国に帰れば、命の保証がない人たち。当時のミャンマーでは、政治活動に参加しただけで逮捕されることはザラだった。どこへ行くかを選ぶ余地もなく、親戚が住んでいる日本へ行くしかなかったんです」  
ハウルンさんは、親戚を訪ねるといふ名目で観光ビザで来日。ほどなく難民申請の手続きを始めたが、認定が下りるまで数年かかっている。  
「親戚の家があったので、住むところには困らなかつたのですが、難民認定が受けられなければ、まともな仕事につけません。認定を受けられず、

の紛争地帯からの難民の急増は国際問題として最重要視されている。  
5月の伊勢志摩サミットでも議題のひとつとなり、9月には、ニューヨークの国連本部で「難民と移民に関する国連サミット」が開かれた。

リオデジャネイロでは五輪史上初めての難民選手団が結成され、大きな話題になった。もう日本人にとつても、知らないでは済まされない存在なのだ。

「最初は専門用語がわからなくて大変でしたが、わからないことは率直に聞き、教えてもらっていますから大丈夫。幼いころから、私はおしゃべりでしたから(笑)」  
来日時には全く日本語が話せなかったことが信じられない

「13年9月から働き始めたハウルンさんは、翌年、同社の難民スタッフ初の正社員に昇格した。  
「最初は専門用語がわからなくて大変でしたが、わからないことは率直に聞き、教えてもらっていますから大丈夫。幼いころから、私はおしゃべりでしたから(笑)」

「もともとベルシヤ語の名前でしたが、日本に来てから菜恵命灯にしました。漢字は自分で選びました。命を灯すという意味はとていい。『灯』が『日』になると大変だね」と、笑う。確かに、日々と「命日」になってしまふ。

菜恵さんは67年、イラン生まれ。父は大学教授、母方の祖父は国王とも交流があった名家の出身だ。  
23歳で結婚し、イランの大学で社会学を教える教授になったが、96年、29歳のとき母国を追われる身となった。

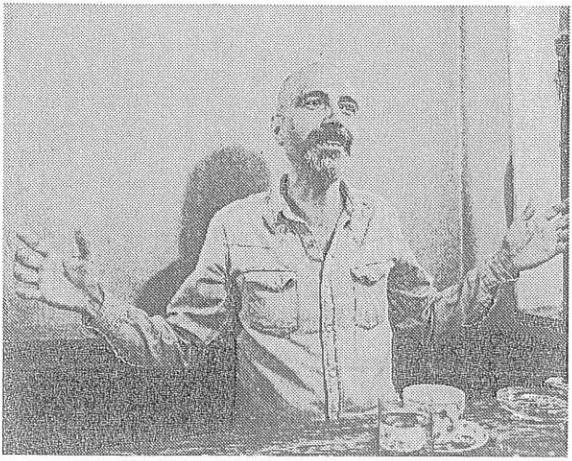
妻とともに夜、馬に乗って国境を越え、トルコから日本へと渡ってきた。日本を選ん

## 「大好きな父が、がんに。でも僕は帰って見舞うこともできない」

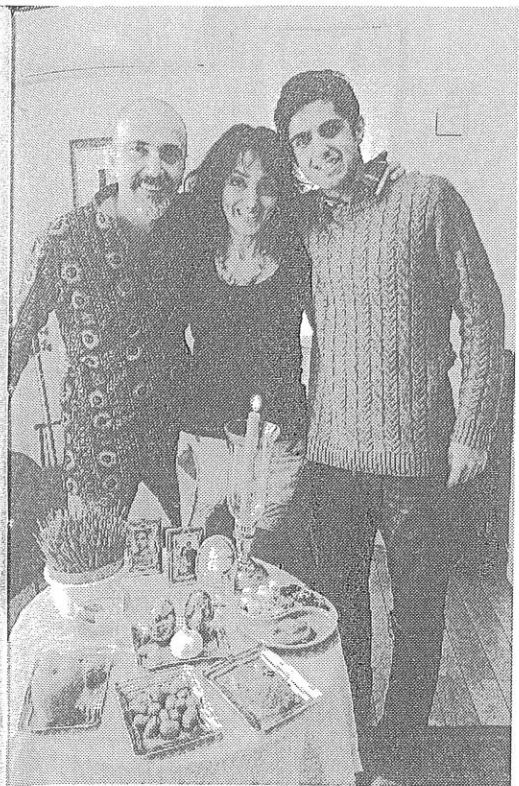
この取材を始めるきっかけとなった菜恵さんは陽気で快活だ。  
「もともとベルシヤ語の名前でしたが、日本に来てから菜恵命灯にしました。漢字は自分で選びました。命を灯すという意味はとていい。『灯』が『日』になると大変だね」と、笑う。確かに、日々と「命日」になってしまふ。

「13年9月から働き始めたハウルンさんは、翌年、同社の難民スタッフ初の正社員に昇格した。  
「最初は専門用語がわからなくて大変でしたが、わからないことは率直に聞き、教えてもらっていますから大丈夫。幼いころから、私はおしゃべりでしたから(笑)」

「もともとベルシヤ語の名前でしたが、日本に来てから菜恵命灯にしました。漢字は自分で選びました。命を灯すという意味はとていい。『灯』が『日』になると大変だね」と、笑う。確かに、日々と「命日」になってしまふ。



菜恵さんは「ペアドビール」を醸造・販売するペアド・ブルーイング社に勤務し、全国を飛び回る日々をおくる



来日時、妻のおなかには長男は19歳。サッカー部で活躍し、大学進学も決まっている。「妻とは長年一緒だから、もうけんかもないよ」

のように、日本に親戚がいたわけでもなかった。洪谷で知り合ったイラン人が一緒に仕事を探してくれ、やっと見つけたのが弁当工場のアルバイト。元大学教授のプライドもかなぐり捨てて、菜恵さんは臭いを発する残飯を捨て、容器を洗い、弁当製造ラインに入って重い米を運ぶなど、肉体的

労働に従事した。「妻が妊娠していたから、出産費用を捻出しなければいけなかったんです」難民認定されていない状況では、健康保険も使えない。時給580円で、月に30万円を稼いだというから、いかに長時間労働で、休みもなしに働いたかがわかる。「難民申請をしてから、大好

きな父が、がんになったと連絡が入りました。でも僕はイランに帰って見舞うこともできない。1年半後、父は亡くなりました」審査は厳しくつらかったというが、大半の人が3年以上かかるなか、菜恵さんはわずか6カ月で認定を得ている。「1日の面接が6時間くらい、次々投げかけられる質問に、迷わずに答えないと、全部ダメ。一からやり直し。

「私も次の面接は3カ月後という具合に、どんどん期間が延びていくんです」と聞かれて「えーっと」と、言いよどむとNG。「大学はどこにありましたか?」と、聞かれて、場所を答えると、地図で確認され、少しでも位置が違えばNG。ちなみに法務省によれば、昨年の難民申請者数は、過去

最多の7千586人に上ったが、認められたのはたった27人。日本での厳しすぎる審査は国際社会の批判的にもなっている。彼は難民認定証明書を受けとった日のことを、昨日のことのように覚えていた。「横浜のイミグレーション(入国管理局)に来るようにとだけ通知が来て、行ってみると、「おめでとうございます」と言われて……」

驚きと喜びで頭が真っ白になった。イミグレーションを出てから、山下公園で妻と2人、いつまでも海を見ていた。だが菜恵さんは、認定後に受けられる生活支援金などの社会保障を一切受けていないという。「月額いくらでも、生活費や学費の支援を受けるということは、僕には考えられませんでしたよ。認定を受けられ

ただけで十分です。息子が僕(の生き方)を見ている。人生は甘くない。だから、僕は必死で働き、今の生活があるのです」2月の講演時にも菜恵さんはこの話をしていたが、家に帰ってから、妻にこう指摘されたそう。 「働きたくても働けない人もいます。難民としてやって来たら年齢によっては仕事が見つからない人もいます。あなたにはそういう人たちへの思いやりがない!」

に未来を向いて生きてきた。今ではイランの母親や弟妹

### 「日本文学の美しさを伝えたい」カンボジア語-日本語辞典も作成

東京都町田市に「アンコール・トム」というカンボジア料理店がある。32年続くこの店を開いたのが、元難民のベン・セタリンさん(61)だ。すでに店は、娘で女優のモニカさん(33)夫婦に任せ、セタリンさん自身は、カンボジアの貧しい子供たちに教育の場を与える活動家として、日本と首都プノンペンとを行ったり来たりの生活だ。

少女時代、童謡『月の砂漠』や映画『座頭市』で日本を知ったセタリンさんが憧れに夢膨らませ、国費留学生として、日本にやってきたのは18歳のとき。カンボジアでは70年に内戦が始まり、当時すでに政情は不安定だったが、来日当初は母親や7人の弟妹たちと文通ができた。だが手紙の内容は、しだいに緊張をはらんだものへと変わっていった。

「運のいいことに家族はみな無事」《僕たちの高校にも(ロケット)弾が》1発落ち、先生と生徒がひとりずつ死んだ》75年、内戦終結とともに事態はさらに悪化。ボル・ポトによる残虐支配と鎖国政策が始まり、以後、セタリンさんには、母国で何が起きているのか、家族の情報すら一切、

入らなくなってしまう。東京学芸大学の大学院に進んだころ、ニュースで知った故国の状況はあまりにもショックだった。78年末にベトナム軍がカンボジアに侵攻し、大勢のカンボジア難民がタイへ流出した。翌々年の'80年、難民キャンプに収容されていた弟2人と妹1人の所在がわかり、なんとか日本に呼び寄せられた。「成田まで迎えに行きました。みんな、私に飛びついてくるかと思っていました。奇妙に静かで。ボル・ポト政権下では黙っていたほうが身のためだったのでしょう」

自身も文学作品を書いて、カンボジアの文学賞を受賞している。その作品は、現地で映画化の話もあるという。10年、カンボジアのシハモ

夫のレンさんは翻訳会社を経営。「孫を溺愛していて、子守りはしっかりしてくれるんです」(セタリンさん)

も、僕たち働くよ」って。涙が止まらなくなりました……」博士号を目指していたセタリンさんだったが、学業はいったん諦め、就職するために難民認定を受け、在留資格を変更。

81年から知的障害者施設の指導員として働き始め、同年、留学生の先輩だったレンさんと結婚。83年、モニカさん出産を機に障害者施設を辞め、85年に「アンコール・トム」をオープンさせた。開店資金は、国費留学生としてもらっていた月8万円の奨学金から、毎月2万〜3万円貯蓄に回していたものを投じたそう。 「カンボジアは戦火のなかにあるのに、勉強ができる私は非常に恵まれていると思います。だからほかの国の留学

# リズ人間



「17〜18歳の弟2人は、『妹は学校へ行かせてあげて。で

ただけで十分です。息子が僕(の生き方)を見ている。人生は甘くない。だから、僕は必死で働き、今の生活があるのです」

# リズ・アンコール

生が少し羽を伸ばしていても、私にはできませんでした」アンコール・トムは、カンボジア人の集う場所を作りたというセタリンさんの思いがこもった店だ。

故・永六輔さんが立ち寄ったのが縁で、永さんの番組で店が紹介され、この店で働くことがカンボジア人のステータスにもなっている。

店を切り盛りしながら、セタリンさんは通訳や翻訳の仕事を始め、並行してカンボジア語―日本語の辞典を作る仕事に着手。今ではこの辞典が、日本語を学ぶカンボジア学生たちにも役立つている。

50歳のとき、彼女は一度諦めた学業に復帰し、博士号を取得。さらには首都プノンペンの大学教授に就任した。

母国では、親が国外に出稼ぎに行っている幼い子供たちを保護し、育てているそうだ。日本とカンボジアをまたに



町田駅近くにあるアンコール・トムはモニカさんの夫(右)が切り盛り。モニカさんも女優活動のかたわら、ときどき店を手伝っている

かけて活躍しているセタリンさんだが、その原動力は何だったのだろうか？

「孫をかわいがる愛情と同じような、カンボジアに対する愛情でやっているのです。日本の文学作品が美しいと思っ

## 「国籍にこだわらず、ブレずに正直に生きれば、きつとうまくいく」

今回、難民として話を聞かせてくれる人を探してみると、そのハードルの高さに驚いた。難民であることを周囲に公言していない人も多かった。それだけ彼らは、無理解や偏見を感じているということなのだろうか。

菜恵さんは言う。「知り合いの日本人に難民申請をしていると伝えたとき、『あなた、自分の国で誰か殺

たら、自分ひとりで読むのもつたいない。カンボジアの人も喜ばせてあげたいと思う、そういう愛情です」

セタリンさんのこの大きな愛の一片でも、私たち一人一人が持てたなら――。

「犯罪者？」と、聞かれたことがありました。当時は偏見が今よりずっと強かったですからね」

セタリンさんは、妹がテレビを見て泣いている姿を見たあるお笑いタレントが、「あいつ、カンボジア難民みたいな顔だな」と、侮蔑的な言い方をしたという。

「なんで、そんなふうに言われなければならないの？」

泣き続ける妹を、セタリンさんはこう言っていた。だめだ。「それは難民ということがわかっていないからよ。難民って、いい言葉よ。難民ってなかなか認定されないのよ」

セタリンさんも「難民」という言葉が、いいイメージで語られないことは知っている。それでも、彼女は難民だったことを隠さない。

「難民」って、政治的圧力などのために亡命する人、というように、けつこう偉そうな定義なんですよ」と、笑い飛ばした。

そんなセタリンさんも、難民として過ごしたのは10年ほどだ。'90年には帰化し、日本人になっている。

「当時、カンボジアに通訳として行かないかと誘われて、すぐ行きたかったのですが、難民のまま国に帰るのが怖かったんです。一度、出国してしまうと、もう日本に入れないかなるのではないかと、と」

「怖い」という言葉がセタリンさんから出たことに、驚いた。しかし実際、難民のままカンボジアに帰国し、処刑された人もいたそうだ。

'91年に初めて里帰り。行方不明の両親と弟妹を捜すため、17年ぶりに戻った故郷だったが、家族の消息は結局、つかめなかった。

難民となった人々が、口に

できぬまま心に抱える傷は、深い。しかし、それでも前を向く勇気を持ち、彼らはたくましく生活している。

「そろそろ結婚して子供を産みたいですね。もうすぐ28歳にもなりますから」

そう話すミヤンマーのハウルンさんには、日本に根を下ろし、生きていく覚悟が固まってきたようだ。

イランの菜恵さんも、昨年8月に日本国籍を取得。難民から日本人になった。

「変な外国人から変な日本人になりました。僕はもう完全に日本人です」

日本とカンボジアを行き来するセタリンさんには、国境の概念さえ不要に思える。

「日本人、カンボジア人という。何人、ということではなくて、ブレずに、正しいと思う道を正直に生きていけば、皆が応援してくれて、きつと生きることがうまくいくと思うのです」

紛争などで家を追われた難民や避難民の数は、昨年末、世界で6千500万人を超えた。だが、この第二次大戦後最大の危機の前に、私たちにできることもきつと、あるはずだ――。

取材/本荘そのこ  
文/川上典子  
撮影/五十川満